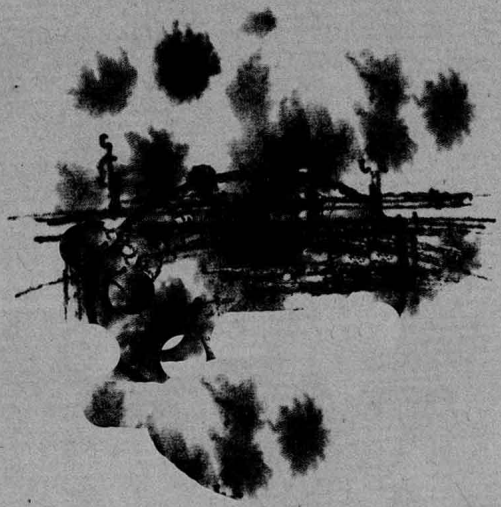
大阪自叙伝

藤沢桓夫

朝日新聞社

大阪自叙伝

藤沢桓夫



朝日新聞社

藤沢桓夫（ふじさわたけお）
1904年大阪市に生る。東京大学文学部卒業。
主要著書／「新雪」「花粉」「妖精は花の匂いがする」「誰も知らない」「将棋水滸伝」「人生師友」「大阪の人」
現住所／大阪市住吉区上住吉町141

大阪自叙伝
一五〇〇円

昭和四十九年九月二十日　第一刷発行
昭和四十九年十一月二十日　第二刷発行

著者　藤沢桓夫
発行者　朝日新聞社　岡見　璋
製版所　株式会社井村印刷
印刷所　内外印刷株式会社
大阪グラビア株式会社
発行所　朝日新聞社　東京・名古屋・大阪・北九州
©藤沢桓夫　一九七四年

0095-254246-0042

目次

ふるさと談義—序に代えて　七

I

回想の楽しさ　二二
生れた土地　二七
文学は環境か　三二
大阪を描いた小説　三六
作家と大阪との因縁　四〇
「芝居裏」の女　四四
文学少年の日　四九
あの頃の中学校　五四

大正の中学教師　五八
初恋の味　六三
学校教師と文学　六八
投書家の王様　七三
むかしの新聞小説　七八
大阪文化と中之島　八二
言葉は変身する　八七
懸賞小説の作家たち　九二
嘘と真実　九六
禁を犯して　一〇一
ペンネームの由来　一〇五
大阪高校を受けた頃　一一〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

新しい文学仲間　一二六
古書を漁る高校生　一三〇
芥川さん訪問　一三五
晩年の芥川龍之介　一三〇
最初の同人雑誌　一三六
小出楢重さんの思い出　一四〇
横光利一氏の手紙　一四五
恩人・宇崎祥二　一四九
同人雑誌の黄金時代　一五四
片岡鉄兵さんのこと　一五九
一匹狼たち　一六四
宗右衛門町の人　一六九
酒と文学　一七四
奇妙な友情　一七九

酒徒行伝　一八四

Ⅲ

詩人小野十三郎　一九〇
武田麟太郎の「釜ヶ崎」　一九八
猟奇の一夜　二〇三
三高の帽子　二〇八
谷崎潤一郎寸描　二一三
ビラを撒く大学生　二一八
大阪の大佛次郎　二二三
横光さんのこと　二二八
人生に師あり　二三三
菊池寛先生のこと　二三八
心尽しのちらし寿司　二四三

遊廓の煙草屋　二四八
天衣無縫の人　二五三
大阪の奇人　二六一
梶井基次郎の面影　二六七
織田作之助登場　二七二
おもろい男　二七七
庄野兄弟　二八二
今東光和尚　二八七
与謝野晶子の思い出　二九二
俳人橋本多佳子　二九七
五味康祐と司馬遼太郎　三〇二
忘れ得ぬ人々　三〇七
あとがき　三一二

カット　小出楢重
「絵日記」より
装幀　山本耕三

ふるさと談義

——序に代えて

私は大阪で生れ、大阪で育ち、現在も大阪で暮らしている。大阪を離れていたのは、東京での大学生生活の間と、その後の数年だけで、三十歳以後は大阪を離れず、作家生活もずっと大阪でつづけて、今日に到った。従って、自分を生粋の大阪人の一人に数えても、恐らくどこからも苦情は出ない筈である。

右のような意味のことを、私はこれまでに再三文章のなかに書いた憶えがある。それを、今あらためてここに書きしるす気持になったのは、近年の大阪という街の姿の変り方が、半世紀以上もの長い歳月の間この街のなかで生きつづけて来た私のような古くからの大阪人さえもが、わが眼を疑わずにいられないくらいに、あまりにも凄まじく、

「大阪も変ったなあ。」

くらいの感慨では、到底追いつきそうもないような実感に迫られるからである。

いつの世、どこの国や土地でも、天変地異、戦火、産業の変革、政治の移り変りなどの結果として、多種多様の破壊と建設が繰り返され、町の姿や人の心が新しいものに変って行くことは、当然のことと考えられるし、歴史もまたそれを実証しているが、それにしても、戦後の二十余年間に大阪の街の姿に現れたその変り方のはげしさは、過去にも例がないのではないかという気さえする。

――序でにいえば、その変り方の具体的な拍車の役割をつとめたのが、ひろい意味での科学技術――殊に物理・化学の近年の目ざましい進歩にあることは明らかで、それが建築様式や交通様式をも大

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

幅に変革したことは、現在の大阪の街の中空にまで我が物顔に触手を伸ばしている高速道路の交錯に端的に表現されているといってよいだろう。全くの話、敗戦直後の昭和二十二、三年頃に、大阪人の誰が今日のこの大阪の変り果てた姿を予測することが出来ただろうか。

それにしても、「人の噂も七十五日」と古い諺にもある通り、もともと人間は忘れっぽく出来ている。現在のすっかり変ってしまった大阪を見ていると、過去の大阪のこと、それも遠い遠い昔のことではなく、ついこの間までの街の姿、それに不可避的に結びついていた風俗・習慣・年中行事のようなものまでを、大阪人のお互いが今にすっかり忘れ去ってしまいそうな、何か残り惜しいような、不安に似た思いさえ湧いて来る。

自分の知っている大阪、見て来た大阪のあれこれを、思い浮かぶままに、書きしるしてみよう、と私が思い立ったのは、大体そうした気持からである。私が書かなければ、みんなが忘れてしまうこともあるだろうし、忘れてしまうには惜しすぎる「古い大阪」の良さや可笑しさもいろいろあるだろう。この仕事は必ずしも無意味ではないだろう。それに、私の思い出は必然的に自分の少年期から青年期への回想にも繋がるわけで、私にとって一度は書いて置いてよい自分のための文章にもなるであろう。私の半自叙伝にもなり、大阪の半自叙伝にもなるこの仕事に、私は次第に作家的意欲の湧き上って来るのを覚えた。

とはいえ、私の知っている大阪は、さして古い大阪ではない。私が生れたのは、日露戦争が始ま

った明治三十七年だった。従って、私の知っている大阪は、明治の終り頃から、大正、昭和の今日までの半世紀余りということになる。

年齢的にいって、現在中年以上に達している大阪人たちは、自分たちのふるさとに関して、大体私と似通った記憶を持っている筈で、これから私が書いて行く事柄のなかには、彼らの共感をそそる思い出も少なくないのではないかという気がするのだが、残念ながら、現在四百万とか五百万とかいわれる大阪の人口比率から考えると、私自身をも含めて、旧い大阪を知っている人たちの数は、それを知らない人たち――若い世代の人口に対して、比べものにならないくらい減少しているのは、否定しがたい事実であり、ここでも、桜の宮の造幣局の桜並木の「通り抜け」を引き合いに出していうと、

「年々歳々花相似たり。歳々年々人同じからず。」

と歌った古い中国の詩人の諸行無常の嘆きが、そっくり当てはまることになる。

「花」の連想から、はからずも私は造幣局の「通り抜け」をここに持ち出したが、ことの序でにいうならば、大阪の名所・旧跡の大半が、時代というブルドーザーの騒音によって、新しい都市建設の進行の邪魔物として、取り払われたり、踏み潰されたりして、跡形もなくなりつつある実状のなかで、大阪の名物的名所として、稀らしく旧態をそのままに残している行事の一つであるといえよう。今年も「通り抜け」の案内状はわが家にも届き、家内と子供が女の連れを誘って出掛けて行っ

た。招待日は確か四月十三日で、今年の春は雨が多く不順であったためか、せっかくの桜は満開には遠く、まだ蕾のものが多かったそうだが、いずれにしても、毎年何十万という市民が観桜を愉しみに行くこの「通り抜け」は、現在の大阪が土や樹に親しむ場面を殆ど喪失してしまっているだけに、まことに珍重すべき行事で、いつまでも存続をのぞみたい気がする。いつ頃から始まったのか知らないが、私の子供の頃から行われていたし、場所も造幣局の構内というのが、何か大阪的な突飛さで興味深い。

私のペンは早くも少し脱線しはじめたようだが、話をもとに戻していうと、大阪の変り方があまりにもはげしいので、今日の若い世代の大阪人たちには、私の回想に浮かぶ大阪の諸相も、私自身にはついこの間のことのような気のする思い出であっても、恐らく信じられないような、嘘のようなイメージのものが相当に多いのではないか、と私は思うのである。

そして、それは、二十世紀前半に於ける世界全体の社会的変貌が、人類の歴史のなかでも驚異的なくらいに、あまりにも飛躍的で大きかったこと、そのことから起った衣食住など生活形式面の変遷が、前時代の常識を遙かに超えて、かなり超スピードであったことに、根本的な原因があったと見て間違いないだろう。

早い話が、この期間中に、飛行機・飛行船が発明されて人間は空を飛ぶことが出来るようになり、また映画（私の少年の頃は活動写真と呼ばれていた）というものが生れ、それが物を言うトーキー

になり、更にそれに色彩が加わり、一方ではラジオ・テレビという明治の時代に生きた私たちの近い祖先の人々には想像もつかない便利な器具が一般家庭にはいりこむようになったのだから。

俗に「隔世の観」とか「隔世の感」とかいうが、全くその通りだといいたい。

ここで、私の子供の頃をちょっと振り返ってみよう。

私は少年時代を島之内で送った。

島之内は、船場と並び称せられる大阪の旧い商業地区で、安井道頓・道卜によって開鑿された堀割によって大体四角形に囲まれた大阪の中心部にあり、船場の南隣りに位置している。島之内という名称は、南は道頓堀・東は東横堀・北は長堀・西は堀江といった風に、四方を川に囲まれて、一種の島のような形になっているところから生れたものだろうと思われる。

住民は殆ど商人で、それも自家営業の小商人といった商家が軒を並べていて、その間に所謂しもた家が点在した。昼間は、雑然とした、人の出入りの多い、活気のある、薄汚い町だった。

往来にはあちらこちらの商家の店の前に、牛や馬の輓く荷車が、商品を揚げたり降したりするために、停められている図も、日常的にしばしば見られた。

何しろ、大阪の街のなかで自動車の姿など殆ど——というより、全然といってよいくらいに、見かけることが出来なかった明治の終り、大正の始め頃のことだから、これらの牛馬車が、大量の商品運搬という、今日のトラックや実用車の果している役割を担当していたわけだが、現在の区劃拡

張でうんと広くなった大阪市中を探し廻っても、恐らく昔日の牛馬車にめぐり会うことは不可能に違いない。ここにも、時代風景の移り変りが端的に振り返られる感じである。

ここまで書いて、馬の輓く荷車で、ふと思い出した面白い挿話があるので、書いてみよう。それはユーモリストで現在は漫才の家元のような存在になってしまった秋田実からいつか聴いた話で、幼年時代の彼自身が登場する珍事件である。

秋田実は私と同じく生粋の大阪人で、旧制の今宮中学・大阪高校・東大文学部と、ずっと私と同じコースを進んだ。もっとも、学年は私の方が一年上だったが、この小柄で柔道が強く数学が滅法よく出来た下級生と、どういうわけか、私は中学の時代から妙にうまが合い、昼休みの時間などに、校庭の隅っこなどで、よくピンポンをして遊んだ。

ピンポンといっても、これは軟式のテニス用のゴムのボールでする遊びで、土の上に線を引いてコートを作り、手をラケット代りにしてボールを打ち合うのだが、秋田も私も申し合わせたように左利きで、どちらも負けず嫌いと来ているので、この遊びにはなかなか熱がはいった。

現在の子供たちに比べて、私たちの少年時代は、日常の遊び道具、その種類といった点でも、可哀そうなくらい恵まれていなかった。とにかく、ろくな材料がなかった。そういう時世であっただけに、テニス・ボールでするハンド・ピンポンは、伸び盛りの中学生の発明しそうな恰好の遊びの一つであったといえよう。

さて、それは秋田が四五歳頃のことらしいが、その頃秋田の家は大国町の交叉点の付近で煙草店を営んでいた。ある日の午後、幼児の秋田はちょこちょことわが家の表へ飛び出た。いつもの通り、どうやら真対いの商家へ遊びに行くつもりであったらしい。ところが、ちょうどその時、その商家の表には一台の馬の輓く荷車が停っていた。小柄な秋田はその年頃には非常に小さな童子であったろうと想像されるのだが、往来に飛び出した秋田は、次の瞬間には、何んのためらいもなしに、眼の前に佇んでいた馬の腹の下、つまり前脚と後脚の間を潜り抜けて、真対いの家に駆けこんでいた。あっという間の出来事だった。

ところが、この光景を、たまたま家の店の間から、秋田のお父さんが見ていた。

秋田のお父さんは、だいぶ以前に亡くなられたが、砲兵工廠に永年勤続して、砲弾の製法に新工夫を加え、表彰されたこともある技術家だったが、一徹頑固な明治人間の一つのタイプで、子煩悩な好人物でもあった。それだけに、眼の前で自分の下の息子が馬の下腹に飛びこんだのを見ると、あっと叫んで表へ飛び出した。と思うと、

「おいっ。危ないやないか！」

と、荷物の運搬人足でもある馬方を叱りつけ、怒りの余り、馬方の横面をぽかりとやった。

秋田は、その時の思い出を私に語って、

「うちの親父も無茶苦茶や。大体自分の息子が勝手に馬の下を潜ったんやし、腹が立つんやったら、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com